

豊かな音楽表現活動を育む保育

— 36ヵ月児の歌唱行動の分析より —

庄司洋江・塩沢千文

The Early Childhood Education and Care which Bring Up

Pregnant Musical Expression

— The Analysis of Singing-behavior in 36 Months Children —

Hiroe SHOJI and Chifumi SHIOZAWA

要旨：子どもの豊かな音楽活動を育む保育内容「表現」のあり方を考えるために、長野県下伊那郡高森町有線放送が20年間継続している番組「我が家の主役たち」の記録から、1,215名の音楽表現954件、201曲を分析した。

その結果、子どもの歌は変わることなく歌い継がれていることがわかった。そして、1) 36ヵ月児には豊かな音楽表現がある 2) 36ヵ月児の歌唱行動には個人差がある 3) 36ヵ月児はたくさんの歌に囲まれているの3点を明確にした。これらのことから、保育者は子どもの表現活動を受け入れ、子どもに寄り添った活動を行い、環境を整えることが重要であることを確認した。

Key words：保育内容 (contents of early childhood education and care), 音楽表現 (musical expression), 歌唱行動 (singing-behavior), 36ヵ月児 (36 months children), 保育者 (nursery school and kindergarten teacher)

はじめに

幼児期の音楽について幼稚園教育要領¹⁾および保育所保育指針²⁾における領域「表現」では、「音楽を媒体とした心情の育ち」をねらいとして記しているが、その具体的な内容については、小学校学習指導要領の教科「音楽」のように示されていない。

一方、乳児の構音の発達過程は、月齢8ヵ月でおよそ70%に規準喃語が表れ³⁾、音楽的喃語の出現は8～9ヵ月でおよそ50%、25ヵ月で100%といわれており、知的・精神的発達の過程から、3歳から7歳までの間の保育者の役割は重要であるとされている⁴⁾。

そこで保育者養成の立場から、音楽的発達

の研究や園児の音楽嗜好・保護者の期待調査等を報告している先行研究⁵⁻¹¹⁾をもとに、就園前の子どもの音楽表現の状況を知ることが必要であると考えられる。

本稿は、長野県下伊那郡高森町有線放送が20年間継続している3歳の誕生日を迎える子どもたち（以下、36ヵ月児と称する）を対象としたインタビュー番組「我が家の主役たち」の記録を分析したものであり、その結果をもとに、幼児期の音楽表現をさらに向上させるには、どのような保育活動が求められ、また、保育者の資質としてどのような感性や音楽的能力が求められているのかを考察し報告するものである。

1. 番組「我が家の主役たち」およびその収録

本研究の資料である長野県下伊那郡高森町有線放送¹²⁾およびその番組「我が家の主役たち」について触れておきたい。

長野県下伊那郡高森町の有線放送の町内への普及は最も多い時で90%をこえている。町内における有線放送の活動は、緊急・災害時の連絡網機能だけではなく、有線放送の自主制作番組を企画し、町内のできごとを報じ、町民の声を反映させてきた。2004（平成16）年からは、ケーブルテレビ化を行い、現在では、動画の放映も行っている。

1987年に開始した有線放送番組「我が家の主役たち」は、「三つ子の魂百まで」という諺をヒントに提案され、3歳の誕生日を迎える子どもと、80歳を迎えたお年寄りの家庭を訪問してインタビューした内容を編集した番組である。しかし、お年寄りについてはしばらくして消滅し、3歳児のみが継続された。20年間の継続の要因は、担当者の意欲とともに、町民の支持を得た番組であったことによると考えられる。インタビューは1名で、20年間担当者は変わらなかった。

収録対象者は全町民であったが、実際の人選はランダムであった。したがって、人数にもバラつきがある。収録の方法は、インタビューが自宅を訪問し、家族も同席して行われた。インタビューは、あらかじめ用意したいくつかの質問項目を中心に、状況に応じてインタビューを進行させている。収録の中で多くの子どもが歌をうたっているが、歌唱を強制されたわけではない。しかし3歳の誕生日を数日で迎える時期は自己意識が芽生えており、家族も驚くほど雄弁になることもあれば、寡黙になってしまいインタビューが成立しない場合もある。後者の場合には、日を改めて母親・兄弟姉妹などがインタビューになっているケースもある。また、収録前に緊張を取り

除く会話をしたつもりでも、マイクに向かうとそれまでと違ってしまうことも多いという。インタビューそのものが、その家族にとって、あるいはその子どもにとって重大なイベントとして迎えられていたと感じられる。

そのように収録したものを月毎に編集し、「今月の我が家の主役たち」として全町内に放送された。

ケーブルテレビ化してからは、子どもがスタジオに赴くようになった。出演依頼に関する働きかけを中止した結果、参加人数は激減した。内容も動きの表現が中心となり、会話や歌は少なくなっている。また、ケーブルテレビのこの番組の視聴者は、出演者の関係者に限られ、希望者が訪れなくなった時点で番組を終了させる予定であると担当者は語っていた。

2. 調査および分析の方法

全町内に放送された「我が家の主役たち」の再生テープを用いて分析した。

- ・対象となった期間 1987年～2007年
- ・収録対象者数 1,215名
- ・歌唱行動が特定できたケース 994件
- ・曲名が特定できたケース 954件

曲名が特定できたものについて、その曲名と出現頻度について集計した。また、36ヵ月児の歌唱表現はどのようなものであり、選曲や声に経年による変化があるかどうかを中心に分析した。さらに、インタビューとの面接により、インタビューの際のエピソードを聞き、結果の分析に用いた。

3. 結 果

1) 調査対象者の構成

収録対象者1,215名の年毎の人数構成を性別に表1に示した。

インタビューの期日は、それぞれ3歳の誕生日のおよそ一週間前に行われている。就園前の子どものほとんどであるが、未満児保育

表1 調査対象者の構成

(単位:人)				
収録年〔収録年(生年)〕	男児	女児	不明	計
1987〔昭62(昭59)〕	33	52		85
1988〔昭63(昭60)〕	30	51		81
1989〔平1(昭61)〕	11	12		23
1990〔平2(昭62)〕	24	35		59
1991〔平3(昭63)〕	33	54		87
1992〔平4(平1)〕	43	44		87
1993〔平5(平2)〕	42	39		81
1994〔平6(平3)〕	24	34		58
1995〔平7(平4)〕	19	38		57
1996〔平8(平5)〕	36	29		65
1997〔平9(平6)〕	19	35		54
1998〔平10(平7)〕	33	34		67
1999〔平11(平8)〕	29	30		59
2000〔平12(平9)〕	41	33		74
2001〔平13(平10)〕	31	31		62
2002〔平14(平11)〕	31	28		59
2003〔平15(平12)〕	32	31	1	64
2004〔平16(平13)〕	16	16		32
2005〔平17(平14)〕	13	12		25
2006〔平18(平15)〕	16	8		24
2007〔平19(平16)〕	6	6		12
総 計	562	652	1	1,215

園児も含まれている。しかし、就園・未就園や家族構成・兄弟関係などに触れたインタビューケースは少なかった。

内訳は、男児562名、女児652名、性別の判断が不可能な児1名であった。また、各年の人数にはバラつきがあり、1991年・1992年の87名が最も多い。1989年4月から1990年3月までのデータは不明であるため、1989年は23名と少なかった。2004年からはケーブルテレビ放送となり、MD録音からDVD録画へ移行した。収録数は半減し、以降減少している。

2) 曲 名

1,215名のうち994名に229種類の音楽表現があった。994名は、インタビューの「おうたをうたってくれるかな?」という問いかけに答えている。残りの221名は、インタビューの方向が音楽表現に向かっていなかった。また、ひとりで1曲歌った者は976名、2曲が17名、

3曲が1名いた。

さらに、曲を最初から最後まで歌うことができる児もいるが、自分の好きな部分や得意な部分を歌っている児も多い。そこで、曲名を特定できた954件を今回の調査対象とした。その結果、特定できた曲目数は201曲あった。

最も回数多く歌われた曲は、「ちゅーりっぷ」(71回)である。ついで、「犬のおまわりさん」(69回)、「どんぐりころころ」(68回)、「ぞうさん」(53回)、「大きな栗の木の下で」(42回)であった。

また、201曲のうち36曲が、テレビ番組主題歌・挿入歌やアニメの歌(以下、アニメソングと称する)であった。アニメソングを一曲通して歌える子どもは少なく、歌いたくても歌えないと思われる。アニメソングのうち、28曲は、発声、発音が不明瞭であり、ごく一部分から曲名を特定し集計した。

子どもたちの選曲についてインタビューは、「子どもたちの選曲は、日ごろ歌っているいくつかの曲の中から自分が今一番歌いたいと思うものを選んで歌う様子がみられた」といい、そのため「同席した家族や兄弟が促す曲が歌われるわけではないと思われた」「童謡・唱歌・軍歌・ポピュラーソングなどは家族の影響が感じられ、日常生活の中で家族と一緒に歌っていると思われた」「アニメソングの選曲では、本人中心の歌唱が多く、熱唱していても何を歌っているのかよくわからない傾向があり、その傾向は核家族や兄弟の少ない子どもに多いと感じられた」と収録時のエピソードを語っている。家族構成とアニメソングの選曲との関係は不明であるが、いずれにしても、アニメソングは幼児の生活の中で見過すことができないと思われる。

20年間に3回以上歌われた64曲を、表2にまとめた。

3) 選曲の特徴

36ヵ月児の選曲の条件として、性別・季節

表2 曲目および歌唱回数

(単位：回)

No.	曲 名	回数	男児	女児	No.	曲 名	回数	男児	女児
1	ちゅーりっぷ	71	16	55	33	ハッピーバースデートウユー	6	2	4
2	犬のおまわりさん	69	17	52	34	むすんでひらいて	6	2	4
3	どんぐりころころ	68	30	38	35	子狐(ごぎつね)(ごぎつねこんこん・・・)	6	2	4
4	ぞうさん	53	22	31	36	しゃぼん玉	5	3	2
5	大きな栗の木の下で	42	15	27	37	小鳥の歌(ことりはとつてもうたが・・・)	5	3	2
6	げんこつやまのたぬきさん	39	14	25	38	ドレミの歌	5	1	4
7	かえるの合唱	38	20	18	39	ウルトラマンタロウ	4	4	
8	こいのぼり	24	17	7	40	線路は続くよどこまでも	4	4	
9	うれしいひな祭り	22	1	21	41	にんげんていいな	4	3	1
10	かたつむり	20	13	7	42	七つの子	4	3	1
11	さんば「となりのトトロ」より	17	5	12	43	あめふりくまのこ	4	2	2
12	ウルトラマン	15	14	1	44	こぶたぬきつねこ	4	2	2
13	A B C の歌	14	7	7	45	にこにこぶん	4	2	2
14	アニメ・ドラえもののうた	13	4	9	46	ひげじいさん	4	2	2
15	夕焼小焼	12	6	6	47	雨降り	4	2	2
16	とんぼのめがね	12	4	8	48	大きな古時計	4	2	2
17	靴が鳴る(おててつないで・・・)	12	4	7	49	おもちゃのチャチャチャ	4	1	3
18	めだかの学校	11	5	6	50	うさぎとかめ	4		4
19	アニメ・セーラームーンのうた	11		11	51	もりのくまさん	4		4
20	おうま	10	6	4	52	はたらくくるま	3	3	
21	鳩(ぼっぼぼはとぼっぼ・・・)	10	5	5	53	アニメ・マジンガーZ	3	3	
22	アニメ・アンパンマンのマーチ	10	3	7	54	いとまきまき	3	2	1
23	桃太郎	9	5	4	55	やきいもグーチャーパー	3	2	1
24	かわいいかくれんぼ	9	3	6	56	ミッキーマウス	3	2	1
25	雪(ゆきやこんこ・・・)	9	2	7	57	たきび	3	1	2
26	お弁当箱	8	2	6	58	とんでったバナナ	3	1	2
27	汽車ぼっぼ	7	6	1	59	赤いくつ	3	1	2
28	おつかいありさん	7	3	4	60	おおきくなったら もう ぜったい きめた	3		3
29	お母さん	7	3	4	61	おなかのへるうた	3		3
30	蝶々	7	2	5	62	ぞうさんのぼうし	3		3
31	たなばた	7	1	6	63	ゆりかごのうた	3		3
32	うみ(うみはひろいな・・・)	6	4	2	64	春よこい	3		3

がどのように現れており、20年間にどのような変化が現れているかをまとめてみた。祖父母の有無や年上の兄弟の有無などの家族構成やその家族の音楽嗜好などが影響すると考えられるが、それらを収録記録から明らかにすることはできなかった。

(1) 性 別

229の音楽表現の中で、男児には138種類の音楽表現があり、女児には150種類の音楽表現があった。表2で明らかなように男児と女児の選曲には差がある。そこで、5回以上歌われた曲の中から、男児と女児の選曲の差の傾

向をまとめたのが表3である。性差のある選曲として、男児は10曲、女児25曲があがった。

女児の人数が男児より90名多いため、1回歌われると男児は562分の1、女児は652分の1として、男児と女児とに1%以上の差があるものは、男児で多い曲は3曲、女児で多い曲は6曲であった。

顕著な差があるのは、男児の「ウルトラマン」(男児14回・女児1回)と女児の「セーラームーン」(男児0回・女児11回)であり、一方はほとんど選曲していない。また、男児の「こいのぼり」(男児17回・女児7回)に対し

表3 選曲の特徴(性別)

No.	曲 名	回数差	(割合で求めた差)	男 児	女 児	全 体
1	ウルトラマン	13	0.0234	14	1	15
2	こいのぼり	10	0.0195	17	7	24
3	かたつむり	6	0.0124	13	7	20
4	汽車ぼっば	5	0.0091	6	1	7
5	うみ(うみはひろいな・・・)	2	0.0040	4	2	6
6	おうま	2	0.0045	6	4	10
7	かえるの合唱	2	0.0080	20	18	38
8	しゃぼん玉	1	0.0023	3	2	5
9	小鳥の歌(ことりはとてもうたが・・・)	1	0.0023	3	2	5
10	桃太郎	1	0.0028	5	4	9
1	ちゅーりっぷ	39	0.0559	16	55	71
2	犬のおまわりさん	35	0.0495	17	52	69
3	うれしいひな祭り	20	0.0304	1	21	22
4	大きな栗の木の下で	12	0.0147	15	27	42
5	アニメ・セーラームーンのうた	11	0.0169	0	11	11
6	げんこつやまのたぬきさん	11	0.0134	14	25	39
7	ぞうさん	9	0.0084	22	31	53
8	どんぐりころころ	8	0.0049	30	38	68
9	さんぽ「となりのトトロ」より	7	0.0095	5	12	17
10	たなばた	5	0.0074	1	6	7
11	雪(ゆきやこんこ・・・)	5	0.0072	2	7	9
12	アニメ・ドラえもののうた	5	0.0067	4	9	13
13	お弁当箱	4	0.0056	2	6	8
14	アニメ・アンパンマンのマーチ	4	0.0054	3	7	10
15	とんぼのめがね	4	0.0052	4	8	12
16	ドレミの歌	3	0.0044	1	4	5
17	蝶々	3	0.0041	2	5	7
18	かわいいかくれんぼ	3	0.0039	3	6	9
19	靴が鳴る(おててつないで・・・)	3	0.0036	4	7	12
20	ハッピーバースデートウユー	2	0.0026	2	4	6
21	むすんでひらいて	2	0.0026	2	4	6
22	子狐(ごぎつね)(ごぎつねこんこん・・・)	2	0.0026	2	4	6
23	おつかいありさん	1	0.0008	3	4	7
24	お母さん	1	0.0008	3	4	7
25	めだかの学校	1	0.0003	5	6	11

て女兒の「うれしいひな祭り」(男児1回・女兒21回)では、「こいのぼり」を選曲する女兒が少数いるのに対して、「うれしいひな祭り」を選曲する男児は1名である。

このことから、36ヵ月児は、自己表現としての音楽に、男らしさ・女らしさを意識して選曲しているように思われる。

(2) 季 節

放送は月毎に行われるため、月別に集計した。月の特定ができない件数は4件あった。

1曲について5回以上歌われた702件についてまとめたものが表4である。

選曲で明らかに季節を意識していると思われるのは、「うれしいひな祭り」であった。しかし、「こいのぼり」は5月を中心に行っているが、四季を問わずに歌う曲となっている。特に「ちゅーりっぷ」は年中選曲されていることがわかる。「雪(ゆきやこんこ・・・)」「たなばた」などは件数が少ないため季節を選んでいるとはいえない。

表4 選曲の特徴(季節別)

(単位:回)

No.	曲名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	不明	総計
		59	49	60	79	57	55	66	61	59	53	42	58	4	702
1	ちゅーりっぷ	1	1	5	12	8	5	9	3	7	10		9	1	71
2	犬のおまわりさん	6	6	4	3	6	10	4	8	9	6	3	4		69
3	どんぐりころころ	13	5	5	4	4	1	5	6	3	5	9	6	2	68
4	ぞうさん	2	10	3	6	3	6	4	3	4	3	2	7		53
5	大きな栗の木の下で	2	1	4	4	1	5		7	3	5	8	2		42
6	げんこつやまのためきさん	6	2	3	4	3	2	5	4		2	1	6	1	39
7	かえるの合唱	3	1	1	2	3	3	6	7	3	3	2	4		38
8	こいのぼり			1	7	10	2	1	1		1		1		24
9	うれしいひな祭り		2	14	5							1			22
10	かたつむり	2	1	2	1	1	4	3		3	1	1	1		20
11	さんぽ「となりのトトロ」より	2			1	2	3	2	2	2	1	2			17
12	ウルトラマン	2	1		1	1	1	2	4	1			2		15
13	A B C の歌	1	1		2	1	1	5			1		2		14
14	アニメ・ドラえもののうた	2	3	1		1		1		1	1	1	2		13
15	とんぼのめがね	1		1	2	1	1			2	3	1			12
16	靴が鳴る(おててつないで・・・)	1	1		2	1			3	1		2	1		12
17	夕焼小焼	3		3	1	1	2				1		1		12
18	アニメ・セーラームーンのうた	2		2	1			2	3				1		11
19	めだかの学校		3		2		1	4		1					11
20	アニメ・アンパンマンのマーチ			1	3		2			2	1	1			10
21	おうま	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1			10
22	鳩(ぼっぼはとぼっぼ・・・)		1	1	1		1	1	1			2	2		10
23	かわいいかくれんぼ		1		2	1		2		2	1				9
24	雪(ゆきやこんこ・・・)	2	4	1	1					1					9
25	桃太郎	1	3	1						1	1		2		9
26	お弁当箱	1		1	2					3			1		8
27	おつかいありさん			1		1		1		1	1	1	1		7
28	お母さん			1			1	1		4					7
29	たなばた							1	5				1		7
30	汽車ぼっぼ	1	1		1	1			1	1		1			7
31	蝶々				1		1	2		1	2				7
32	うみ(うみはひろいな・・・)			2	1			1		1	1				6
33	ハッピーバースデートゥユー	1			2			1		1			1		6
34	むすんでひらいて	1			2	1	1					1			6
35	子狐(ごぎつね)(ごぎつねこんこん・・・)	1			2	1	1					1			6
36	しゃぼん玉			1				1			1	1	1		5
37	ドレミの歌						1	1	2		1				5
38	小鳥の歌(ことりはとともうたが・・・)	1				4									5

「おうたをうたってくれるかな?」というインタビューでは、子どもが一番歌いたい歌が選曲される。それは自分で歌うことができる曲であり、音楽表現の自己表出と考えられる。子どもがいつ学習したのか不明であるが、最も得意な音楽表現を行うとき、歌詞の意味を熟知し、大人が考えるような季節にあった

ものを選曲するわけではないと思われる。

(3) 選曲の変化

選曲がどのように変遷をしたか、出現状況を20年間に30回以上歌われた7曲について図1に表した。数値の算出方法は、例えば、1987年に歌われた85件のうち「ちゅーりっぷ」は2回なので、 $2/85=0.0235$ 回とした。

その結果、収録方法が音声から動画へと移行した2004年以降に若干の変化がみられた。しかしそのことは、収録数の減少が影響していると考えられる。その他、選曲の出現状況

に特徴は見られなかった。このことは、子どもたちの歌は、絶えることなく歌い継がれていることを表しているといえるであろう。

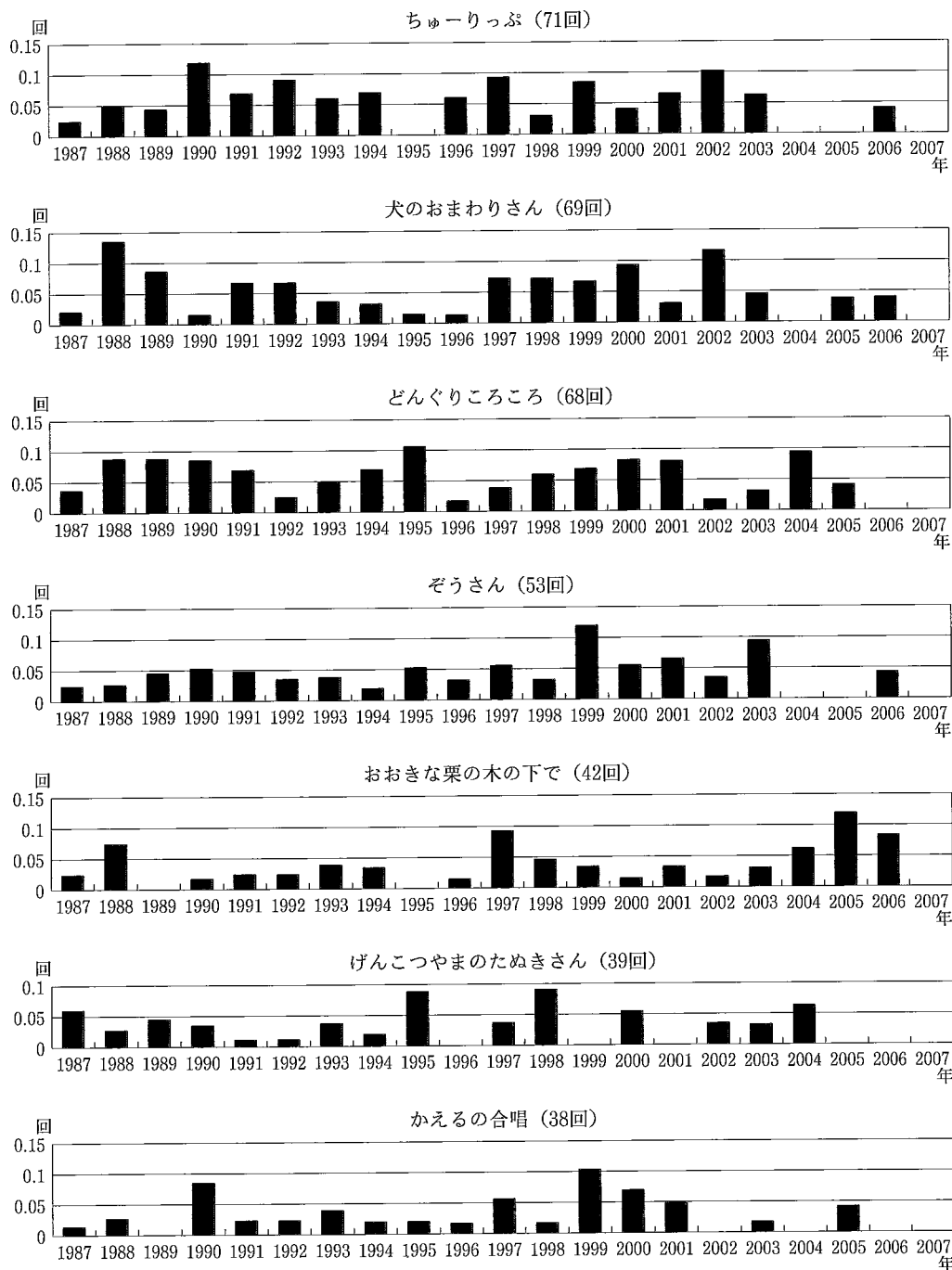


図1 選曲の出現状況

表5 出だし音の年度経緯

	ホ	ヘ	嬰ヘ	ト	嬰ト	イ	変ロ	ロ	ハ	・嬰ハ	・ニ	・嬰ニ	・ホ	・ヘ	・嬰ヘ	・ト	・嬰ト	・イ	・変ロ	・ロ	・ハ	・嬰ハ	・ニ	計	平均	SD
1987					1			1	6		1		7	4	2	4		6	1	2				35	13.89 ± 3.81	
1988						1	2	4	8	2	10	5	12	3	4	8	2	5	1					67	12.58 ± 3.22	
1989								2		1	1	1	5		1	2	2					1	16	13.63 ± 3.76		
1990								2	3	9	8	9	11		4	4			1					51	12.06 ± 2.29	
1991				1		3	4	2	5	9	4	5	10	6	4	9		2	1	3	1			69	12.45 ± 3.80	
1992				1	1	1	5	2	3	7	8	5	12	3	6	2	2	3	3	3		2		69	12.75 ± 4.09	
1993					1	2	4	3	5	6	12	3	8	3	4	4	1	1	3	3				63	12.13 ± 3.74	
1994			1	1	2	1	1	3	4	7	6	3	5	4	3	2		1	3	1		1		49	11.78 ± 4.20	
1995				2		2	2	1	2	2	8	4	8	3	1	3	4		2	1				45	12.24 ± 3.80	
1996				1		1		6	6	3	7	3	5	2	3	3	2	1	2	1	1			47	12.17 ± 3.86	
1997	1			1		2	4	1	4	4	7	7	7	1	2	4		2						47	11.17 ± 3.50	
1998						4		3	4	11	6	1	7	5		2	2	2	1	2				50	11.88 ± 3.60	
1999						1	1	1	2	7	6	4	5	6	3	4		2	2	2	1	1		48	13.31 ± 3.77	
2000				3		3		3	7	9	6	5	7	5	3	3	5	1		2			1	63	11.95 ± 3.94	
2001							1	1	6	6	7	3	4	5	2	1	2	3	1	2				44	12.66 ± 3.41	
2002				3	1	2	1	1	1		7	5	2	2	3	1			1	3		1		34	11.97 ± 4.88	
2003							2		4	4	3	5	7	4	1	7		3		1				41	12.95 ± 3.10	
2004									3	2	3							1	2	2				13	12.26 ± 0.56	
2005						2	1		4	1	2			1	1				1					13	10.38 ± 3.73	
2006						1				2		1	2	2	1	1	1							11	12.73 ± 3.13	
2007								1	1			1						1		1				5	13.40 ± 5.37	
総計	1	0	1	13	6	26	28	37	78	92	112	70	124	59	48	64	23	34	25	29	3	3	4	880		

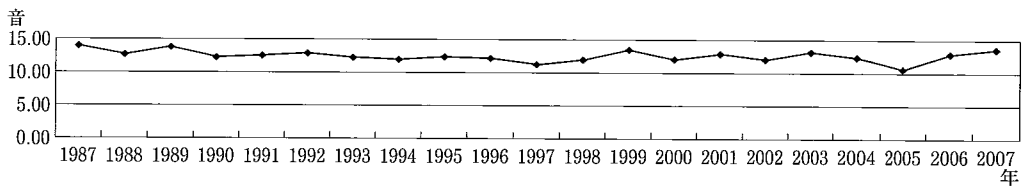


図2 出だし音の変化

4) 出だし音の変化

36ヵ月児は楽譜を見て歌うわけではない。しかも、無伴奏で歌われている。歌い方についても、囁き声であったり叫声に近い声であったり様々である。収録の様子からは同席している家族にリードされているものもあれば、自ら歌っていると思われるものもある。おおかたの36ヵ月児は、聞いて覚えた歌を自分の歌い易い高さで歌うと思われたことから、幼児の声の変化を検証できるのではないかと音楽表現の出だし音を調べた。その結果880件のデータを得て、表5にまとめた。

最も低い音は、日本音名「ホ」であり、最

も高い音は「二点ニ」であった。日本音名「ホ」を1とする数値化による880件の平均値は、 12.37 ± 3.74 (S.D.)である。それは、日本音名にすると「一点ホ」のやや上あたりとなる。

また、収録年ごとの平均値を図2に表した。さらに、性別・曲目別の散布図を作成し、近似曲線を描くと、わずかであるが下降傾向が見られる。男児に比べて女児にその傾向がある。曲目別になると、全く変化のない曲、上昇している曲、下降している曲がある。これらの結果を図3に表した。

しかし、これらの結果から、対象集団を母

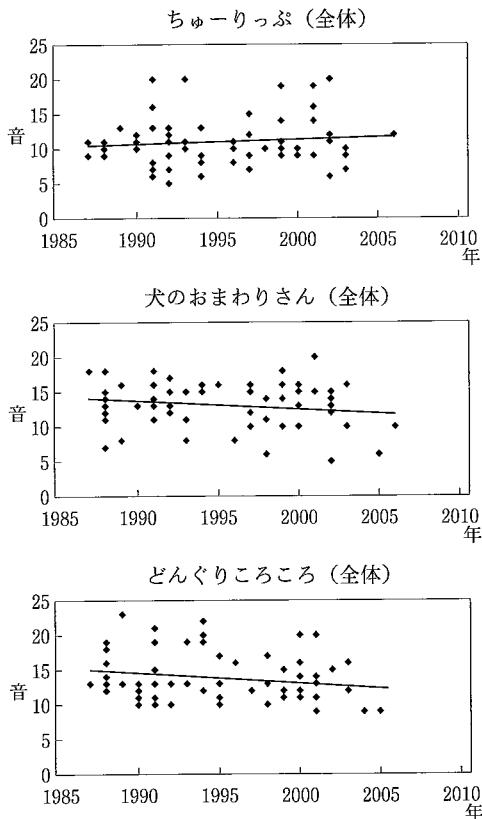


図3 曲目別出だし音の変化

集団として、出だし音についての経年の変化や特徴を論じることは妥当ではないと思われる。本稿では結果の報告に留めるものとする。

5) 教科目「音楽」および「子どもの表現活動A」履修学生の歌唱曲の認知度

飯田女子短期大学(以下、本学という)幼児教育学科2年生22名を対象に歌の認知度を調査した。本調査の3回以上歌われた64曲に、特徴的と思える曲と、本学の「子どもの表現活動A」の授業で使用するテキストの中のいくつかの曲を加えた167曲について、「歌える」「だいたい歌える」「歌えない(含一部しか歌えない)」「知らない」の4区分に分け、該当するものに○をつけるという方法で調べた。

167曲の内、「歌える」「だいたい歌える」という歌は27曲(17%)であった。「歌えない」「知らない」と半数以上が回答した歌は17曲

(10%)であった。後者の歌はテキストに含まれていない歌であった。

本稿表2の64曲中、子どもの歌唱回数上位11位までの歌は、ほとんどの学生が「歌える」という結果であった。

子どもが歌いたいと選曲した歌を保育者が「知らない」とはいき難い。子どもの要求に応じることが必要である。保育者はより多くの歌を知り、子ども一人一人の要求に応え、一緒に歌い伴奏によって支えることによって、子どもを豊かな表現へと導くのである。小学校学習指導要領では歌が決められ与えられているのに対し、幼稚園、保育園では保育者に選曲を任されている。保育者がねらいを立て、自ら選曲をし、歌う活動を導くことは当然あるが、子どもが心から歌いたいと思って歌うとき、そのときそこに寄り添う保育者が一緒に口ずさんだり、楽しそうに聴くことが、本当の意味での豊かさに繋がるのではないだろうか。したがって、子どもの歌を多く知っているほど子どもに近付いた保育といえるだろう。そういった点から考えると、本学学生の子どもの歌の認知度は高いとはいえない。

22名中1名は、保育士資格等の取得を希望せず、保育内容「子どもの表現活動A」を履修していなかった。その学生A子と他の学生との比較を試みた。「歌える」を1点、「だいたい歌える」を2点、「歌えない(含一部しか歌えない)」を3点、「知らない」を4点とすると、A子の平均値は2.4、他の学生は2.28であった。この値から、これらの教科目の履修が多く歌と触れ合う機会となっていると考えられる。

保育者の専門性を問う場合、多くの歌を知る必要があることは今回の調査でわかったが、「童謡」の変遷やその意味、その歌の成り立ちや曲趣曲想などの曲分析、テレビアニメやドラマの幼児番組の内容や主題歌について知ることでもある。また、自らが歌う表現の学習においても、前述した点を理解した上

での表現は、音楽表現の向上に結びつく。

4. 考 察

「幼児教育が歌と一体であることは常識なのだが、歌の上手な先生も現場ではまた少数派である。歌があって初めて伴奏楽器の存在意義があるのに、本末転倒のピアノレッスンで音楽嫌いを作り出すようなやり方」あるいは「＜幼児音楽教育＞を本来の姿にするには（中略）『歌える先生』を作るカリキュラムを実践することである」と述べ、「幼児教育の現場および教育者養成が、近年の音楽環境やその水準から乖離している」という服部¹³⁾の指摘は、学生の音楽表現を高めていくためにはどのようにしたらよいかを考えるための一助となった。本研究における入園を迎える子どもたちを対象とした20年間の録音記録を分析する音楽表現の調査から、36ヵ月児の音楽表現の特徴とその変様を明確にするためには充分な数値とは言えないと考えられ、データの分析に終始する結果となった。

しかし、保育者養成の視点からは、保育者の資質としてどのような感性や音楽的能力が求められているのかについて多くの所見を得たので、以下の3点にまとめて、本研究の考察とする。

1) 36ヵ月児には、豊かな音楽表現がある

…保育者はその芽を摘んではならない

乳児が言葉を発する前から、大人は乳児とのかかわりにおいて、目と目を合わせお互いを確認し合ったり、声と声の応答を楽しむ行為を自然と行う。大人が言葉がけを盛んに行うことや、子守歌や童謡などを歌って聞かせることは、親子または母子の信頼関係を築きあげることになる。それらは音楽のすばらしさを知っていく初段階となり、歌う活動の出発点になる。

本調査対象の1,215名のうち994名(82%)に音楽表現があった。このことから36ヵ月児

にとって歌う活動は日常的で身近なものであることを確認した。

36ヵ月までの歌唱は、母親や家族の子どもへの話しかけや歌いかけ、あるいはテレビやビデオなどのメディアを通していつの間にか覚えた結果の表現である。しかも、36ヵ月児は、自分らしさを音楽で表現する行為として、男児であることや女児であることを意識して選曲するといった、性別への意識が向いていることがわかった。また、男児は男の子らしさを強調するようなアニメやアニメソングを好み、強調された激しいリズムに乗って歌いたいのが歌えないもどかしさもある中で、身体いっぱい使い自分らしさを音楽で表現しようとする姿を感じた。また、子どもは歌詞の意味を理解していなくても音楽の持つ力によって興に乗って歌う姿が見られる。今回の調査の中で、機器音を通して流れてくる子どもの歌ではあるが、「帰ってこいよ～」と自分の声を震わせ、震わせること自体を楽しんでいる様子が伺えるものがあった。歌うことが快いもの、楽しいものと感じているように思われる。そして、テンポは遅いがその分丁寧に、歌に集中して歌っている子どももいた。

この成長過程を保育者や家族が認識し、表現を認め受け入れることは、子どもにとって安心して表現できることに繋がる。さらに、保育者は自分自身が歌うことに喜びを感じ、実際に子どもの前で歌ったり、歌を聴いて口ずさむなど、場の雰囲気づくりや環境づくりを整えることが必要であると同時に、そのことが子どもが歌うことが好きになる一要因となることも認識することが必要である。

今回の調査を通して、36ヵ月児の音楽表現を確認でき、子どもから発信する音楽表現を見逃さず受容するための、保育者としての感性の育成と、芽を摘まずに伸ばすことの必要性を認識した。

2) 36ヵ月児の歌唱行動には個人差がある
…保育者はどの子にも合わせた歌い方が
できなければならない

子どもの中には、子どもには難しいと思われる曲も難なく歌ってしまう子どもや音程やリズムも正しく、発音も明瞭に歌っていた子どもがいた。また、前奏部分を抽出音で歌い、間奏部分では正しいテンポを取り、再度歌を続けていく子どももいた。そのように音楽の流れを感じて歌える子どもは予想より多く見受けられた。

それに対し部分的には歌えるが、途中で歌えなくなりリタイアしてしまう子どももいた。また、歌唱中の発音には多くの子どもに不正構音が見られた。歌唱のみならず、インタビューに答える話す言葉にも見られた。「何歳ですか?」の問いに対し「しゃんしゃいでしょ」「たんだいでしょ」などの幼児訛りなどである。尚、本調査は、言葉の獲得や言葉の表現と歌唱表現についての関連性の分析までは進んでいない。

出だし音については20年間の変化は特に見出されなかった。

音程については、正しい音程で歌うことは稀であった。歌いだしはよいが、途中から音が取れず、歌を軌道修正しなければならない状態になり、しまいには調性が不明となって終わってしまうケースが多々あった。

このように36ヵ月児の歌唱能力の発達には大きな個人差がある。

したがって、この時期の子どもの歌唱を支えるには、歌い方の結果のみを評価するのではなく、子どもたちのたくましくバイタリティーに富んだ表現を全て受け入れる姿勢が必要である。そして、その子どもたちの創造的な表現をより豊かにする保育のあり方を模索しなければならない。

個人差があるこの子どもたちに対し、保育者は、一人一人に寄り添って支える方法を見につけなければならない。子どもの歌いだし

を瞬時にキャッチし、歌が継続していくことがよいと思われたときは、その子どもに合わせて子どもと一緒に歌を共有する。子どもの歌う高さで、子どもの歌うテンポで、子どもに合わせた声量で歌う。途中からでも歌えるようにする。そのような歌唱力を習得するためのひとつの方法として、合唱やアンサンブルの学習の検討が待たれる。保育者が子どもの歌に声を合わせる力があれば、歌唱が未熟な子どもであっても、中途半端で不快と感じられる歌唱で終わることなく満足感を持って歌い終えることができるであろう。保育者は子どもの歌声に自分の歌声を合わせられる歌唱を身につけるための「合わせる学習」は、人の声を聴いてハーモニーを形成するアンサンブル並びに合唱表現の中に見出される。自己の歌唱表現力の向上は勿論のこと、子どもの歌唱を支える力を習得することが課題である。今後の教科内容の検討の根拠にしたいと考えている。

3) 36ヵ月児はたくさんの歌に囲まれている
…保育者はたくさんの歌を知ることが
大切である

20年間に994名から229種類の音楽表現を採集し、201曲の曲目を調査した。出現頻度の高い曲についての分析から、歌はいつの時代でも歌い継がれていくと予測することができた。入園前の家庭生活において祖父母、父母、兄弟によって形成される遊びの環境の中で、豊かな音楽表現があることが伝わってくるのである。唱歌中心の時代の祖父母とのかかわりやアニメソングと出会うメディアとのかかわりなど、たくさんの歌に囲まれている36ヵ月児の環境が想像された。

このことを高森町が意図し、コミュニティのあり方の一端を有線放送に託し、36ヵ月児を持つ家庭と有線放送とのかかわりを設定した、と考えることは飛躍している。しかし、少なくとも「我が家の主役たち」という番組

が20年間継続し支持を得た番組であることを評価したい。

そして保育者は、その点を踏まえ、子どもとの共通な歌を共有できるよう、1曲でも多くの歌を知る努力が必要であると思われる。子どもの豊かな心を育む環境のひとつとして、保育者は園児の音楽環境を保障しなければならないであろう。そのために、保育者自身が数多くの曲を知り、次々と生み出される新しい歌に対する感性を磨く必要があることは確かなことである。

おわりに

本稿をもとに、幼児言語、幼児心理学、幼児文化の視点から、さらに、考察を深めたい。そして、今回の調査対象コミュニティ以外の地域との比較や、3歳・4歳・5歳と成長するにしたがって変化するであろう音楽表現にどのように対応していくべきなのか等についての研究を課題としたい。

本稿は、平成20年5月17・18日に行われた日本保育学会第61回大会において口頭発表したものである。

謝 辞

最後に、本研究にあたり20年間の収録データを提供してくださいました高森町有線放送、並びに、番組「我が家の主役たち」を20年間担当し、快くインタビューに応じて収録の際の様子についてご協力下さいました熊谷洋子氏に御礼申し上げます。

注

- 1) 保育指針研究会：幼稚園教育要領 平成12年度施行版，文部科学省，2005.
- 2) 保育指針研究会：保育所保育指針 平成

12年度施行版，厚生労働省，2005.

- 3) 小林春美：言語前期の言語発達。言語発達とその支援（岩立志津夫，小椋たみ子編），ミネルヴァ書房，京都，2002，p.73.
- 4) 高橋仁美，濱田豊彦：表現の発達を考える。音・音楽の表現力を探る（荒木紫乃編），文化書房博文社，東京，2003，p.52.
- 5) 大谷純一，鈴木泰子，大場麻美子：今日の保育者養成校における音楽教育に関する一考察 ―幼稚園側の要望を手がかりに―。日本保育学会大会発表論文抄録，57，562-563，2004.
- 6) 細田淳子，小野明美：ことばの獲得期における音楽的表現。保育学研究，41(2)，58-65，2003.
- 7) 大山美和子：幼児の音楽表現に関する保育的意味について。清和女子短期大学紀要，25，103-110，1996.
- 8) 大橋千代子，島田伸夫：現代の幼児の愛唱歌とその背景―アニメ・ソングと童謡を通しての考察―，就実論叢，24，199-222. 1994.
- 9) 多保田治江：幼児の歌う活動について―アンケート調査による幼児の好む歌―。北陸学院短期大学紀要，15，11-30，1983.
- 10) 多保田治江：幼児の歌う活動について(2)―アンケート調査による幼児の好む歌―。北陸学院短期大学紀要，16，57-73，1984.
- 11) 多保田治江：幼児の歌う活動について(3)。北陸学院短期大学紀要，19，5-27，1987.
- 12) 高森有線放送：有線三十年，高森有線放送農業協同組合，長野（高森町），1988.
- 13) 服部公一：子どもの声が低くなる！，筑摩書房，東京，1999，pp.210-211.